平成19年度
フレンドシップ事業報告書

宮城教育大学
環境教育実践研究センター

目次

はじめに　1

1　平成 19 年度フレンドシップ事業の概要　2

2　青葉山自然観察　3

3　幼児期の子どもと自然観察　１５

事業のまとめ　１７

はじめに

フレンドシップ事業は、平成１０年より当時の文部科学省によって開始された事業であり、その主旨は教育実習では実現できない学生と子どもの触れあいの場を、大学の授業の一環として実現するというものであった。宮城教育大学でも、私たち環境教育実践研究センター、理科教育講座、臨床教育研究センターの３部門で、毎年フレンドシップ事業を実施している。

環境教育実践研究センターのフレンドシップ事業は、本センターのフィールドミュージアム構想の一環をなすものとして中期計画の中に位置づけられた事業である。

本センターによる事業は、授業「環境教育ｂ」（１／２年、前期２単位）の受講者を対象に行われてきた。その目的は、学生に対して子どもの自然体験学習を支援する能力の育成を図るとともに、教育実践体験を行い、それを通じて、子どもの潜在的な観察・体験能力を学生に学んでもらうというものである。

実践事業にいたるまでの過程では、学生に対して「教える側」としての能力の必要性を強調し、指導を行っているが、そののち実質的には予測不可能な因子に満ちた野外での実践体験に連れ出すことで、学生が予期せぬ展開を体験し、その場で表出される子どもの行動や判断力を先入観なしに学ぶことが可能になる、という二重の視点を併せ持っている。さらに付け加えるならば、この事業は、自然体験学習の機会の不足しがちな教育現場のニーズに沿って、教師やこどもの野外体験学習を支援するというメリットを持っている。したがって、この事業における教育実践は、教育実習とは目的や学びの質をやや異にしている。「自然の中の子どもに学ぶ」ことを重視した本事業は相互的であり、実践的であり、また教育機関との連携なしには行われ得ないものであった。

関係協力機関のご協力に深く感謝をする次第である。

事業名
平成１９年度教員養成学部フレンドシップ事業
代表者
斉藤千映美

１　平成１９年度事業の概要

平成１９年度は、２つの青葉山自然観察会（代表：斉藤千映美、溝田浩二）による２プロジェクトによって実施された。

この事業は、平成１０年度以来、授業「環境教育ｂ」と連動して行われてきた。環境教育ｂは、前期水曜日の第一時限目に実施されている授業である。授業は合計１５回行われるが、例年授業の受講生に対して、４月の授業（３回程度）を一般的な講義に当て、その後は野外における自然観察や、子どもの指導に関わる学習を行った。また、例年受講生を３つ程度のグループに分けて、それぞれ別の指導者が指導を行い、教育実践活動も別個に独立して行っていた。しかし平成 19 年度、本学のカリキュラムが改正されて、新カリキュラムでは「環境教育ｂ」が開講されないことになった。旧カリキュラムの「環境教育ｂ」は、受講者がいる限りは開講されるが、例年受講者の多くは一年生であり、実際 19 年度の受講生は３名にすぎなかった。

平成 19 年度よりスタートする新カリキュラムでも環境教育関連科目が多く出講されているが、その多くは２年次以上で受講するしくみになっていることから、新カリキュラムでは平成 19 年入学生を対象とするフレンドシップ事業の実施が困難である。そこで本年度に限り、フレンドシップ事業を、旧カリキュラムの「環境教育 B」と合わせて、大学院の出講科目である「生物学特別演習」「フィールドワーク特別実習」において実施することとした。「環境教育ｂ」受講者は、毎週水曜日の正規の授業時間を用いて、自然観察の実習を行った。その後に、宮城教育大学附属幼稚園を対象とする自然観察会（７月２１日）に参画した。一方、「生物学特別演習」受講者は、生きものを対象とする自然観察会の計画を実施して、対象を保育所八幡こばと園の４～５才児クラスとする教育実践を行った。実践に際しては、「フィールドワーク特別実習」受講生のみなさんにも参加してもらった。以下に、保育所八幡こばと園を対象として実施した青葉山自然観察会の概要を述べる。

２　青葉山自然観察

２－１　目的と概要

宮城教育大学を取り囲む青葉山の自然を観察学習するための基礎トレーニングを課し、並行しながら、近隣の保育所に通う園児に対して、２回の自然体験学習の指導を行う。２回の同じ子どもたちを対象とする実践体験を経て、学生は子どもの成長を体験的に知りながら、自身の実践力の向上を確かめることができる。

また、基礎的なトレーニングを通じて、学生は身近な自然と、その季節に応じた移り変わりを学ぶことができる。

参加する学生は、例年は「環境教育ｂ」の受講生が対象であったが、大学の学部カリキュラムの改革が行われたため運用が難しくなり、今年度は大学院「フィールドワーク特別実習」受講生、および「生物学特論」の受講生、合計１２名を対象とすることになった。

以下が事業の実施関連の概要である。

参加学生　１２名
指導　斉藤千映美（環境教育実践研究センター）
対象　仙台市保育所八幡こばと園の４～５才児クラス（２４名）
連携協力　仙台市青葉の森管理センター、社会福祉法人保育所八幡こばと園
日程　詳細は別添の資料の通り。９月１１日、１０月１１日の２回にわたり、教育実践活動を行った。

２－２　事業の特徴

青葉山自然観察会の特徴は、積みかさねによる体験を重視することである。理由は二つある。

理由の一つは、教育実践の相手をよく知ることにある。自然観察会といえば、普通は一過性で、主催者はともかく、参加者や講師は一期一会の出会いを経験して終わることが多いと思われる。目的は自然を観察することであるから、講師がプロであればそのことは問題にならない。しかし、フレンドシップ事業では、教える側は経験もなく、幼児を知らない学生である。相手の能力を知らずに教えることは難しい。「本番」の自然観察がたった１回きりである限り、学生は「教える」ことよりは子どもという生き物（＝教えるべき相手）の実力や能力を評定するのにそのチャンスを使い果たして終わる。私たちは平成１５年度の自然観察会でこのことを痛感した。具体的にいえば、学生は「自然を観察する」「子どもと観察する」「子供を観察する」という目的を半ば忘れて、子どもと仲良くなることに手こずったり、夢中になったりしてしまうのである。そこで私たちは、昨年度より、子どもとの出会いを積み重ねることでこの問題を少なくとも一部、乗り越えようと考えた。今年度は、８月２７日に保育所を訪問し、日常生活の中の子どもたちの姿を見るとともに、ふれあい遊びを通して学生の緊張をほぐし、自然観察会へのモチベーションを高めることができた。また、実施の期間全体を通して、毎週土曜日に保育所で園児観察を自由に行う機会を作っていただいた。自然観察会そのものも、２回実施した。自然観察会を積み重ねることにより、学生の側には子どもと触れ合う自信が生まれていることを感じた。

積み重ねのもう一つの意義は、学生や子どもが、絶えず変化しつづける自然の中で体験を蓄積することで「青葉山へ行ったことがある」から「青葉山を知っている」という認識を築くことが可能になるところにある。学生たちは青葉山で自然観察を行うことで、季節によって姿を変える森林の姿、天候との関連、山の中のミクロな自然の違いを知り、自分自身の能力の蓄積によって山の見え方がどのように変化していくか、理解することになる。また、2回、間に一月の時間を置いて実践を実施することで、対象となる子どもたちにも、青葉山の自然への親しみを深めてもらうことができた。

このように、青葉山という身近な自然を繰り返し体験することで、自分自身の能力を高めると共に、子どもを知り、自然を知る、ということが、本プロジェクトの最大の特徴である。

２－３　事業の流れ

事業は次のように実施した。

2007 年７月　学生ガイダンスと講義

７月 31 日　実習（フレンドシップについて）
８月７，８日（火、水）　集中講義・実習（青葉山自然観察）
８月９日（木）　実習（自然観察会を想定したフィールドワーク）
８月２７日（月）　保育所訪問・講義
９月１０日（月）事前実習（自然観察会の計画）
９月１１日（火）第一回自然観察会の実施
１０月１０日（水）事前実習（自然観察会の計画）
１０月１１日（木）第二回自然観察会の実施

（上）学生実習中のフィールドワークのようす

２－４　集中講義と実習

本事業では、受講する学生に、青葉山に親しんでもらうための実習を７月 31 日と８月９日に実施した。実習に際しては、青葉の森の散策路を歩きながら、散策路から観察できる動植物を中心とした自然観察を行った。採集した昆虫などの動物を持ち帰り、種の同定を行った。学生は大学院生であることから、青葉山での実習体験がない学生はいなかった。しかし、実習のおもな狙いは、子どもたちを森に連れて行くことを意識しながら自然観察を行うことである。子どもの目の高さ、動体視力、歩く早さを意識しながら散策路を歩くことで、普段とは見えるものが異なることに注意を促した。実習に際して、学生たちに、これまで自然観察会で起きている各種の突発的な事故の事例、危険があると考えられる場所や行為についての説明を行った。

また、８月７・８日の両日、環境教育実践研究センターが主催した公開講座「青葉山環境教育セミナー」の一部を聴講させてもらう機会を設け、学生に参加してもらった。このセミナーでは、日本環境教育学会会長・学芸大学教授、小澤紀美子先生による「日本の環境教育」を始めとする各講義のほかに、環境研の溝田浩二・鵜川義弘両教員による実習が行われた。このセミナーへの参加は、自然観察実習が中心になりがちな学生に対して、環境教育そのものの在り方を考えてもらう機会を設けること、実習の際の観察の視点について、教員から深く学ぶ機会を設けることにあった。

２－５　保育所訪問

８月 27 日、保育所八幡こばと園を学生たちが訪問した。訪問の目的は、日常保育の場を観察し、子どもたちと自然観察の事前に触れ合うことにある。訪問した保育所では、園庭・園内を拝見したあと、今野ひろ子園長から「４歳児の特性」について、講義をいただいた。４歳児は、運動能力や社会性が急速に発達する時期であること、など、その能力について専門的なお話をいただいた。

講義終了後、自然観察会を実施する「すみれ組」（４歳児）の子どもたちとともに、一時間ほど交流して、自己紹介・ゲームなどを行った。自己紹介では、予想外の発言をする子が数人いると同時に、前の子に引きずられて後で自己紹介する子が次々とまったく同じ発言をすることもあって、予想しづらい子どもの行動に驚かされた。また、体をつかうゲームでは、子どもたちの疲れを知らぬ動きに学生たちもすっかり振り回された。

学生側は、自己紹介では大人を相手にしているときのような堅苦しい話し振りのものもあったが、子どもたちがすぐに学生たちと打ち解けて話をするようになり、学生もそれにつれてリラックスする表情を見せていた。

この訪問は、子どもの日常の姿を観察する貴重な機会であり、学生が事前に観察会の対象を把握するために不可欠な必要な作業と位置づけている。

２－６　事前の準備

保育所訪問を経て、学生は教育実践のための時間配分とコースの決定を行った。第一回目は短時間であることと、青葉山を訪れるのが初めての子どもたちが多いことから、コースは「青葉の森」管理棟前から「せせらぎ広場」までの往復とした。このコースを複数回歩いて、学生たちは自然観察のポイントと、観察できる植物・動物のリストを作成した。また第二回目のコースは「スイス池」として、事前にため池の魚類についても調査を行った。

さらに、雨天の場合に備えて、自然の材料を使ったクラフト製作の準備を行った。雨天の場合は、「青葉の森管理センター」を使わせていただき、準備したクラフト制作ができるよう、直前まで学生はプログラムの立案を行っていた。

これらの準備の後、学生主催のガイダンスを実施して、当日の指導に当たる全員で、進行を確認し、緊急時の対応について話し合いを行った。

２－７　教育実践の流れ

教育実践は、保育所からバスで園児を青葉山まで送迎して実施した。実践に際して、大学側からは学生のほか、指導教員、補助員（指導教員の研究室に所属する上級学年の学生）が参加した。また保育所からは、子ども以外に担任を含む３名の保育士が参加した。

青葉の森管理棟前で、学生は一人ずつ子どもと手をつなぎ、自然観察をしながら青葉山で散策を行った。観察の対象となったのは、アリ・アリジゴク・蝶類など各種の陸生昆虫、オタマジャクシ、サンショウウオの幼生、ドジョウ、各種の水生昆虫、植物などである。第一回目は初回であるため、指導教員が先頭に立って学生たちに観察ポイントを指示するようにした。

第二回目は、１０月１１日に実施した。このときは、郷六地区の通称「スイス池」（ため池）のほとりで、稲刈りの終わった田んぼで泥遊びをしたり、ミミズ、トンボ、ヘビなどを観察した。

２－８　考察と課題

学生からは毎回、レポートを提出してもらったほか、保育所からも所見を頂いて学生への評価の参考とした。

学生からのレポートから、自然観察会の感想の例を拾う。

（手をかけずに目をかけて）

・今回担当したＹくんとＡさん。はじめはずっと私の手を握り「ねえ、とってよ」「かまれたらこわい」「気持ち悪いよ・・・」と言っていましたが、一人で挑戦しながら取り組む友達や「今度は自分でやってみよう」という私の声に触発されたのか、途中からは自分で進んで捕まえていました。「バッタつかまえたよ」「トンボこわくないよ」と自慢げに言うＹくんの顔が印象的でした。「手をかけず、目をかけて」今回の２人をみて、改めてそう感じました。

・まず、子どもが自然の中に入ったとたんに、とても元気になることにびっくりしました。「ここは楽しいなあ」といいながら、あちこちにいって、私にとっては普通なものでも、子どもにとっては宝物みたいなもので、大事に拾って、収集していました。

・私の担当した女の子はおとなしく、あまり周囲の景色や動物に興味をもつことがなかったように思いますが、その分ゆっくりとお話をしたり、他の人の集めたものを見せてもらったりして、山の中でいつもとちがう時間を楽しめたのではないかと思います。最初は、小学校に上がる前の自分の記憶はほとんどないということもあってあまり言葉や感受性、運動能力も発達していないのかなと想像していましたが、予想以上に発達していて驚きました。

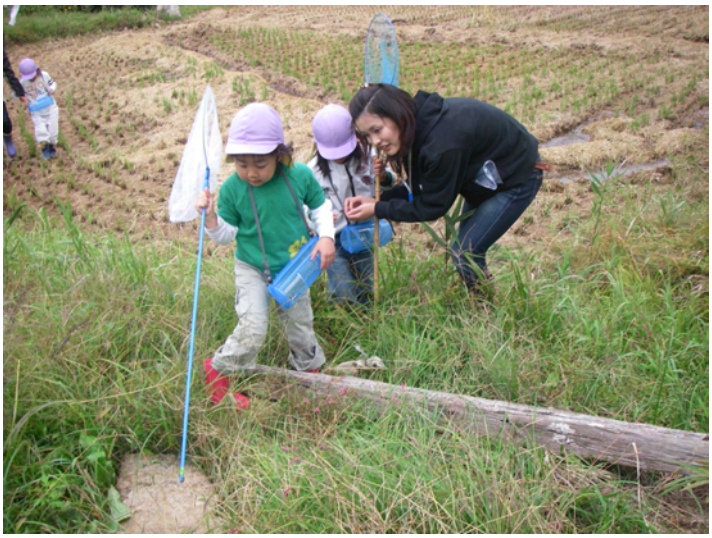
学生が幼児と触れ合う体験は普段ほとんどないし、自分たちが幼

児であったころの記憶を私たちはほとんど持っていない。このため、幼児と接してみて、「思っていたよりも身体的に活発である」「興味関心のあることに対する積極性が大人よりも高い」などの声は、必ず毎年聞かれる。また子どもの素直で自然な言葉や態度には、まだ十分に大人になりきっていないような学生にとっても、心癒されるなにかがある。そうしたものに触れたときの喜びが、多くの学生の感想の中に現れていた。

一人一人の子どもには随分違いがある。虫取りに夢中になる子どもも少なくないが、何かを怖がったり、生き物に興味がなかったり、神経質な子どももいる。学生に対して、素直に親しみを持ってくれる子どもは多いが、中には人見知りをしてしまい、なかなかしたいことを表現してくれない子どももいる。しかし、どんな子どもにとっても、青葉山で過ごす時間が「特別な時間」であってほしい。そのためには、必ずしも生物に興味を持ってくれなくてもよいのである。草むらに座っておしゃべりをしたり、流れる水に反射する太陽の光を眺めているだけでも、幼児にとっては普段の生活ではありえない、大切な一日になっているはずである。学生たちが、それぞれ、手をつないだ子の目線に立ってゆっくりと周りを眺める、そんな一日を送ってほしいと考えている。

（２人の子どものちがい）

・私が担当した女の子二人は、一人がドングリなどの木の実に興味を示していたのに対して、もう一人は虫や土壌などの動物に興味を示していて、確実に２人の安全を守りながら二人ともに楽しませるということが難しい状態でした。ドングリを拾ったり、虫を取ったりを交代で行い、常にどちらかに我慢してもらっていた状態でした。



・男の子がいつでも前に出て、他の子どもが何か捕まえたら見に行くのですが、もう一人の女の子は

ずっと自分の好きなものや興味のある昆虫に夢中で、予定のコースをなかなか進みませんでした。

幼児を対象としていることから、安全確保のために、子ども 1 人または２人に対して学生を一人配置し、互いに自己紹介をして、手をつないで活動させている。パートナーが一対一だとよいのだが、このように 2 人の子どもを相手にしていた学生の大半からは、上のような声が聞かれた。実質、教育の場でマンツーマンになる機会はほとんどないわけだが、本当であれば幼児はたったの 2 人であっても一緒に自然観察するのは難しいことが、学生にも身にしみて感じられる。幼児が一人であればその子の気持ちに十分寄り添うことは可能になるが、その分比較の対象はなくなるし、「誰かと一緒に」という視点が持ちにくくなることを考えれば、人数が少ないことも一長一短である。この場合、学生に必要なのは、ばらばらになりそうな 2 人を結びつけるような積極的指導であるが、あまり学生が前面に出て子どもを指導すれば逆に子どもの自由な活動の可能性が保障されなくなることから、そうした方法を学生には特に強くは要求していない。学生からの提案にあったように、常にフリーのスタッフが数人いて、周りの状況に合わせて補助してくれると、安全面が十分に補償されるので、学生も子どもの指導に専念できるようになりよいであろう。

（反省）

・ ザリガニやヤゴを捕まえた子どもが出てくると、彼ら（担当した子どもたち２人）もほしがり、バッタやカエルへの関心が旧に薄れてしまいました。「バッタしかいなくてつまらない」と一人の男の子が言いました。・・・その場はたまたまコオロギを

発見し、また違う種類の昆虫を捕まえるのに夢中になりましたが、あきさせない工夫が必要だと痛感した瞬間でした。私の知識不足もあり、子どもたちを飽きさせてしまったことは残念です。

- 動物だけでなく、植物などへ関心を向けさせるために、植物をつかってできる遊びの知識も必要だと感じました。花や草で装飾品を作ったり、ドングリなどの木の実でコマを作るなど、動物以外の自然への興味をもたせるようなことをするのも必要だと思いました。実際、なかなか動物を捕まえられないときに笹舟を作ったら、少しの間植物に興味を持ってくれました。・・・フレンドシップで、子どもたちとのかかわり方を学ぶとともに、自分自身の知識、認識の甘さを知りました。

この学生は、自然観察の経験があまりなく、準備段階でも常に自信のなさそうな表情を見せ、後方から他の学生がいろいろなものを発見するところを観察していた。授業の中で学生に対しては、捕虫網を持たせたり、図鑑の所在や種類を教えたりはしていたが、そうしたものを活用して積極的に面白いものを発見しようと試みる学生と、自信のなさから消極的な学生にはっきりと分かれていた。本人の自信のなさが「知識のなさを感じた」という記述につながっているようだが、おそらく本当に不足していたのは、本人自身の原体験であろう。「バッタしかいない？そんなことはない！」と子どもを引きよせる方法もあるし、捕まえたバッタを虫眼鏡で観察すれば、その表情の面白さも楽しめる。この学生は工夫して笹舟づくりを行っていたが、これも子どもたちにとって自然を楽しむ大切な方法である。そのような、自然を楽しむちょっとした工夫をどれだけ子ども時代に体験しているか、によって、自然観察のときの学生の積極性に差が見られるように思われる。この学生の記述を読むと、学生自身に、もっと子どものような気持ちでさまざまな体験をしてもらえる機会を作ることが重要なのだとつくづく感じる。

（課題）

提案された課題として、里山の自然をどう伝えるべきか、という観点があった。まず、次のような学生の意見があった。

- 今回自然観察のために訪れたため池には、ザリガニ、ブラックバスなど、人為的に導入された生物がいて、それらをどのように子どもたちに伝えていくべきなのか？と悩んだ。

青葉山はかなり人手の入った里山環境で、そういう意味で人の影響を多く受けている。本当の自然といってよいのかどうか、疑問を感じる学生の能力にまず敬意を表したい。このことについて、考え方はさまざまであろう。本来であれば、子どもたちの身の回りに優れた自然があることが望ましく、そこにはできるだけ人の手が入っていないほうがよい。

しかし、そうした自然は今ではどこにでも残っているわけではない。幼い子どもたちを学生が引率していけるような場所は、むしろ相当に人間によって管理された場所になってしまっている。人間による影響を否定してしまうと、自然観察会自体が困難になってしまうのである。そうした中、「青葉山自然観察会」は、青葉山を本来人間によって管理されている里山環境と捉え、その身近な自然の中での体験学習の機会と考えている。

ブラックバスなどの移入種問題を真剣に扱うには、中学生、あるいはどんなに早くても、小学校中学年までは学習の内容としては適切ではない。ブラックバスもザリガニも、残念ながら生態系に負の影響を与える存在であることは事実である。従って、自然観察会の主役としては適切ではないという思いがある。しかし、そこにいるものをいないかのように扱うこともまた、不自然に思える。このため例年の自然観察会では、このため池でのザリガニとりが恒例になっているし、子どもたちもザリガニを発見して非常に喜んでいる。ただし年々、ザリガニのサイズは小さくなっていると考えられている。我々の自然観察会によって、環境に影響が生じているのである。人間が集団で活動する以上、自然に対しては必ず影響がある。主催する側には、それがどのような影響なのかを見極める目と、負の影響を最小限にとどめる努力が求められていると考えている。ここでは、本来そこにいるべきではないザリガニの個体群が、自然観察会によって消滅するかもしれないという事実は、少なくとも地域の生態系にとって大きな負の影響ではないと判断しているのである。

他にも、保育所の先生からは、例えば「虫を捕まえて持ってくるのは、良くないことというべきなのか？それとも、見守ってよいのか？」という問いかけがあり、それについても話し合った。正しい回答は一つではなく、どのような考え方が適切かを話し合ったわけだが、主催者側としては、子どもが虫取りをする体験や捕まえた虫を死なせてしまう体験も貴重であり、一概に「捕ることが悪い」と決して言いたくはない。しかし、「むやみやたらに捕まえてきて、後で死ぬだけなのを見るのはしのびない」という保育所側の先生方の意見も聞き、「捕ったものをすべて持ち帰ることはしない」と決めた。捕まえたものを園に持って帰って他の先生や友達、おうちの人に見せたいという子どもの気持ちを大切にしながらも、状況によっては「ここで返してあげる？虫も自分のおうちに帰りたいよ」という声がけをしてあげるようにしたのである。子どもの意思や捕まえた生き物の数や種類、状態によって、柔軟に対応を変えることとしたのである。

３．幼児期の子どもと自然観察

現職教員（小学校）の大学院生の、次のようなコメントを見てみよう。

- 小学校低学年の進め方を踏まえ、幼児期では何を学ばせていけばいいのか、今回参加してみて、学ぶというよりはたくさん感じ取らせることが重要だと思いました。動植物の名前をたくさん覚えるより、触ったり、においをかいだり、五感をつかって感じさせること、また季節ごとに同じ場所に訪れて、季節感や違いをたっぷりと感じさせることが大切だと思われました。４年生の理科の単元にはありますが、もっと小さいころからのほうが、もっと効果的なように感じます。

学習と言うと、教師はどうしてもその対象を要素に区分したくなるが、環境を要素に区分するのは容易なことではない。環境そのものが常に移り変わり、部分ではなく全体として存在しているからである。子どもに自然体験の機会を作るときには、たとえ漠然としていても、「そのときの自然を感じてほしい」、という目的が重要なのである。自然を感じるための手段として、虫とりや草花あそびは楽しい活動になる。

保育所の４～５才児は、幼稚園の年中組に相当する子どもたちで、この時期の子どもたちの自然に対する関心は、急速に高まっていく。ただ動く虫を見つけて追いかけることは、より低年齢の幼児にも見られる行動だが、４～５才にもなると、生き物それぞれの特徴に気づいたり、つかまえるための方法を自分で考えたりするようになっていく。また、生きものとの触れ合いの体験を通して、自分のお気に入りの生物や、お気に入りの遊び場といったものができていく。かわった形の木の実や石などに、自分の想像を重ね合わせて「集めたい」という気持ちを持つことも多い。植物に対する関心は、動物に対するものよりも相対的に未発達であることが多い。しかし、面白い形の枝や実など、植物の部分に関心を持ったり、花を「きれい」と感じる気持ちがわき始めるころである。

自然の中では、これらの動植物を前にした子どもは、ただ見るだけでなく、手に取りたい、触りたい、匂いをかぎたい、などの全身の感覚を用いて体験しようとする。比較すると、大学生はどちらかというと、視覚に強く依存する傾向がある。

また自然環境の中では、ごつごつした岩や流れる水、太い倒木、沈み込む落ち葉など、いろいろな場所を乗り越えて歩いていく楽しみがある。高いところや足場の悪いところに登りたがるのは子どもの特性だが、これは人間に限らず、多くの動物の子どもの発達の段階で現れる通常の行動である。そうした、多様な環境を体験したいという要求を満たすことは、子どもの身体能力を高めるのに役立つのみならず、精神的にも充実感を得ることのできる貴重な体験になる。つい「危ないよ」と手を伸ばしてしまうのだが、子どもの能力を十分に見極めたうえで、意識的にがまんして（しかし、体はつねに動かせる状態にしながら）子どもを見守るよう、努めるようにしなければならない。

一方で、動く虫を怖がったり、森の中を歩くことに不慣れですぐに手助けを求める子どもたちもいる。自然体験の少ない子どもたちが、森の中で自信を持てないことがあるのは当然である。飛んでいる虫やヘビを怖がるのは、ただ経験がないということが理由ではなく、確かにそれらの生物のなかに、危ないものもいるのであるから、むやみやたらに子どもを元気付けるというのでは、対応にならない。

４～５才児の自然観察では、危険の因子に対して配慮しながらも、自然に対する子どもの興味関心を支援し、見つけたものをたくさんほめてあげたり、もっと面白くなるようなヒントを示したりすることで、身近な自然を十分に楽しむことができる。特に珍しい動物を観察しなくても、青葉山のような里山でもよいし、特にプロの指導者がいなくても、学生が補助につくだけでもよいのである。通常保育の行われている園庭ではできない行為として、草の中を駆け回ったり、森の音・におい・光につつまれる体験をするだけで、子どもたちにとってはかけがえのない体験になるからである。大人と比較すれば、全身の感受性がはるかに高い子どもたちであるからこそ、この体験は非常に重要なのである。

すべての子どもに自然体験は必要である。人間は自然から切り離されて存在しているものではない。自然との一体感や自然を快と感じる気持ちは、人間が生きる限り決して失うべきではないのである。４～５才という幼い年齢の子どもたちを対象としている限り、「帰りたい」「外は嫌いだ」という子どもにであったことは、幸いにして一度もない。全員が、みんなでいることが楽しくて、普段と違う体験を心待ちにしているのである。そうであればなおさら、その一日が「怖かった」「いやだったのに、無理やりさせられた」「疲れてつらかった」というものになってはならないのである。怖がっている子ども、おとなしい子どもたちにこそ、子どもの目線で向き合い、新しい体験の扉を子どもたち自らが開けるように、そっと見守りたい。

事業のまとめ

本センターのフレンドシップ事業の主旨は、平成１０年の開始当初より一貫しており、詳細は平成１３年度報告書に述べているとおりである。

本年度の事業は、従来のプロジェクトを継続し、２種類の実践指導をそれぞれ複数の機会にわたって行うことができた。同時に前年度の反省をうけ、さらに次年度に向けての転換を図るためのいくつかの工夫を行うことになった。

本事業は従来、一つの授業を受講する学生を、縦割りに２ないし３グループに分割し、それぞれに教員がついて少人数で実習を行ってきた。最大の理由は、野外学習の性質上、多人数を同時に指導することが困難だからである。また、実践体験は数十人単位の子どもを指導するようなプログラムになっているため、学生の数が多すぎると、子どもより学生のほうが数が多いという不自然な状況になりかねない。１グループあたり最大でも２０人程度という数は、このようにして決められていた。学生はいったんグループに分かれると、常に同じ教員の指導を受けて、その教員が企画する教育実践活動を体験していたのである。

今年度は、カリキュラム改正の過渡期に当たり、対象としてきた授業を受講する学生が３名であったことから、大学院開講科目の受講生を中心としたうえで、事業を２つに縮小して実施せざるを得なかった。

大学院生を対象としたフレンドシップは今回がはじめてであった。大きな違いとして感じたことは、大学院生の側の責任感や主体性が高いことであった。特に、自然観察会全体のスケジュールを立てる場面、雨天の場合のプログラムの組み立て、安全確保に関する話し合いを行ったときなどは、教育実習などを経て教育実践経験をある程度つんでいる大学院生の意識の高さの、学部生（多くは一年生）との違いに感心させられた。しかし、野外での活動状況に関して言うならば、大学院生と学部の一年生に特に差は感じられなかった。むしろ、自然観察を積極的に行っているかどうかと言う観点から言えば、やや慎重であったり、自然ではなく周りにいる他の学生にばかり気を取られている学生が見受けられた。

このような、いくつかの特徴を考えると、事業において、多様な層の学生がそれぞれの役割を分担することで、より優れた事業になることが考えられる。こうしたことも視野に入れながら、新カリキュラムでの事業運営のあり方を今後検討していきたい。

次年度は、新カリキュラムのうち、現代的課題科目群「環境教育」において出講されている「自然フィールドワーク実験」において事業を実施する予定である。